

## 小引

日々の臨床と調和した具体性のある咬合理論は久しく待ち望まれていました。本書は、歯列内の1歯の歯冠修復時に咀嚼に重点をおいた機能的咬合面形態を作製するという実践的咬合理論で、歯列全体の理想的咬合関係を論ずる従来の咬合理論とは一線を画するものです。

臨床歯科医の方々には、まず第4章の臨床例をご覧戴きたいと思います。ここで、咀嚼効率を高めるための咬合面形態がごく日常的に臨床で実現できるとの実感をもたれることでしょう。ストップングの薄片を噛ませるとヒトは常に一定の場所で噛むようですが、この場所は第1大臼歯の小さな部分にあって、主機能部位と名付けられています。この主機能部位がこの咬合理論の核となっていて、咀嚼に重点を置いた機能的咬合面形態には咬合接触点、被蓋を加えた3要素が正しく実現されていけばよいとのこと。そして、この実現の方策は蠟型採得も含めて明確に図解されています。

臨床例で関心をもたれた方々は、機能的咬合面形態の3要素の意義、詳細について記載してある第1～3章をご一読ください。基礎実験の方法、臨床での観察方法は委曲を尽くして解説され、得られた結果が無理なく臨床での機能的咬合面形態へと導かれていく様子もよく理解できます。そして、この機能的咬合面形態作製の成否は、どこの歯科診療室にもあるストップングと、どう使うのでしょうか……プラスチックストリップだけで診査できます。まずは、欠損のない歯列でこの診査を試してみてください。著者とともに追体験ができるということです。そのうえで、この理論、“主機能部位咀嚼理論”は信用するに足る咬合理論か、ご自身でご判断ください。

また、第5章には歯の進化学の面からの考察があって、主機能部位は3,000万年前から受け継がれてきたものとの論述にはびっくりもしますが、ミステリーとかランドマークといった片仮名の単語の入ったやや奇抜な本書の副題にもここで改めて納得をするでしょう。

若い歯科医学の研究者の方には第1章から順を追ってご精読戴きたいと思います。本書は、歯科診療に重点をおきながらも研究を続けている著者の半生を時系列で書いたもののように、機能的咬合面形態への思いの変遷、履歴がよくわかります。まさに、『一つ解ければ、2つの新たな疑問が生まれる』という言葉どおりの年月です。そして終章まで読み進めると、機能的咬合面形態の実践を目指す著者自身の文章が追い付かないかのように、ひたすらに臨床を求める孜孜とした姿も行間に仄見えてきます。ご参考に、机辺の書としてお薦めします。

平成二十二年 月照る夜  
長谷川成男

## 序

本書は、筆者が臨床のなかで役立つ実践的な咬合論を求めた30数年間の成果をまとめたものである。本来の咬合論は上下顎歯列のさまざまな下顎位における咬合関係に及ぶべきものであろうが、本書では第1大臼歯の咬頭嵌合位における咬合関係に終始した咬合論となった。臼歯列の咬合を解明するために代表として第1大臼歯を選んでスタートした研究が、進展するほどに第1大臼歯の知られざる機能状況や重要性が次々と明らかになって、ミステリアスな「第1大臼歯の物語」が誕生した結果である。筆者でさえも研究当初には想像もつかなかった結末なので、読者の皆様が戸惑うことなく肩の力を抜いて読んでいただけるように、ここで寓話風にアレンジしたあらすじを書くことにする。

\*\*\*\*\*

咬合研究が華やかだった30数年前、上下顎の第1大臼歯が「歯冠修復によって生まれ変わる時には、意味のない解剖学的形態には二度と戻りたくない」と理想の機能的咬合面形態を求めて旅立ちました。最初に立ち寄った大学の研究室で、大臼歯は咀嚼時にもっとも大きな側方への力、ストレスを受けていることを知らされます。咀嚼に大いに興味を持った彼らはつぎに臨床の現場を訪れ、診療室のどこにでもあるストッピングの力を借りて、歯列上での咀嚼の中心（咀嚼のランドマーク）を探し、そこで起こるさまざまな出来事を観察しました。その結果、「咀嚼時の食物の粉碎は歯列上でランダムに行われているわけではなく、第1大臼歯の機能咬頭間に局在する“主機能部位”が中心となって営まれている」という事実遭遇。“主機能部位”は機能的な咬合面形態を実現するための重要な鍵となりました。さらに物語の最後には、なぜ第1大臼歯が主機能部位となったのかを知ろうと悠久の過去、進化の世界への旅が始まります。そしてついに、「生まれながらの解剖学的形態こそが機能的であること」「円滑に咀嚼機能を営むためには、上下顎の第1大臼歯が咬頭嵌合位で適切な咬合関係にあることが必要不可欠であること」にたどりついたのです。

\*\*\*\*\*

本文では筆者が以上のような第1大臼歯との旅のなかで発見した“主機能部位”に焦点をあて、「プロローグ」でこれまでの研究や臨床のあらましを述べたうえで、「基礎となる歯の変位様相」、「現代人の主機能部位」、「機能的咬合面形態の実現」、「主機能部位の進化的考察」について詳述する。読者の皆様の理解を深めていただくために、学会発表や学生への講義のために作ったたくさんの図を要所に挿入し、本文には小見出しも付けたので、咬合のワンダーランドを堪能していただければ幸いです。

最後に、これまでご指導、ご援助をいただいた皆様、とくに筆者と第1大臼歯との旅を見守ってくださった長谷川成男前東京医科歯科大学教授、そして、このような執筆の機会を与えてくださったデンタルダイヤモンド社および編集部の谷村茂雄氏ならびに後藤由紀氏に心からお礼申し上げます。

平成二十二年十月

加藤 均